

女性同性愛者のアイデンティティ形成について

—異性愛主義の視点に注目して—

The identity formation of lesbian
Focusing on the viewpoint of heteronormativity

田中 有沙
Arisa Tanaka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : アイデンティティ形成, 女性同性愛者, 異性愛規範, 性的マイノリティ,
複線経路・等至性モデル(TEM)

Key words : Identity formation, Lesbian, Heteronormativity, Sexual minority,
Trajectory Equifinality Model

1. 研究目的

近年の日本では性的マイノリティの著名人によるメディアでの活躍や、東京・関西などでレインボーパレードが開催されることで、性的マイノリティ当事者が声をあげやすくなってきている。また、渋谷区・世田谷区による同性パートナーシップ証明書の発行や性的マイノリティ議員による自治体議員連盟の発足などにより、社会制度の中でも性的マイノリティに対する認識や受容が広がりつつある。しかしながら、未だに異性愛規範の根強く残る日本社会で生きづらさを感じている性的マイノリティが多い現状は払拭されていない。異性愛規範とは、「異性愛を唯一の自然で正当な性愛関係にみせかける働きをしている社会制度、人間関係、言語行為の全体」(中村, 2007)を指す。例えば、日本では同性婚が認められていないことや、「恋愛関係や結婚は異性同士で行うのが当然である」という認識が異性愛規範にあたる。電通総研の世界価値基準調査 2005 によると、日本国内で「同性愛」を「間違っている(認められない)」と考える者はほぼ半数で、「正しい(認められる)」が4割弱だった(石井, 2009)。また、河口ら(2016)が性的マイノリティについての意識 2015 年全国調査の中で、同性との性行為や恋愛感情に対する嫌悪感と抵抗感を一般の男女を対象に実施したところ、約4割~6割以上の人々が嫌悪感や抵抗感を抱くと回答した。他にも、2017年11月の朝日新聞では、自民党の総務会長が「国賓のパートナーが同

性だった場合、私は反対」と語ったニュースが取り上げられていた。これは性的マイノリティに対する差別発言であるとともに、同性婚や同性パートナーの法的な制度の無い日本人ならではの発言と考えられる。なお、主要7か国(G7)で性的マイノリティに対する制度が整っていないのは日本のみである。以上のことから、日本には法的にも社会的にも未だ性的マイノリティを認めない風潮が存在しており、性的マイノリティ当事者にとって生きづらい環境である。中でも、女性同性愛者は、社会から不可視化され、ロールモデルが不在であることからアイデンティティ形成に困難が生じるのではないかと予測される。「性的マイノリティについての意識 2015 年全国調査」(河口ら, 2016)では、他の性的マイノリティに比べて女性同性愛者が最も見聞きされていないことが明らかとなった。杉浦(2010)によると、女性同性愛者の人たちは社会から不可視化されることが多いために表に出ることが困難であり、堀江(2016)はその理由を、「女に対して男と結びつくことによってしか<生>を成り立たせることができない」と人々が認識しているからであると主張する。杉浦や堀江の言う「女性同性愛者の不可視性」も、異性愛規範や女性同性愛者に対する認識の薄さ・ネガティブイメージなどが影響しているように思われる。そこで本研究の研究1では、一般の学生が女性同性愛者をどのように認識、イメージしているのか、また、人々の中にある異性愛規範傾向を

明らかにしていく。女性同性愛者は不可視化される環境下でロールモデルも身近にいないため、どのようにしてアイデンティティ形成をしているのかはほとんど明らかになっていない(杉浦, 2010)。特に、1人の女性同性愛者の人生を時系列的に細かく調査している研究はほぼないに等しい。そこで本研究の研究2では、女性同性愛者がどのようにアイデンティティを形成していったのかを、異性愛規範の視点に注目しながら時系列に沿って調査していく。

2. 研究実施内容

研究1

目的: 社会の異性愛規範傾向や女性同性愛者に対するイメージ・認識について把握する。

方法:

- ・対象者: 大学生および大学院生 100名
- ・調査内容:
 1. 女性同性愛者に対する認識・イメージの自由記述
 2. 質問紙
 - ①女性同性愛者に対する態度尺度(宮澤, 福富, 2008)
 - ②平等主義的性役割態度スケール短縮版(鈴木, 1991)と性的マイノリティについての意識 2015年全国調査(河原, 2016)を参考に作成した質問紙を実施予定。

研究2

目的: 女性同性愛者のアイデンティティ形成についてのプロセスを時系列的に明らかにする。

方法:

- ・対象者: 女性同性愛者 4名
 - ・調査内容: 半構造化面接を実施
- 尚、本研究は平成29年度の大妻女子大学生命科学研究の倫理審査委員会の承認を得て行われた(承認番号:29-021・29-022)。

3. まとめと今後の課題

研究1

2018年4月以降に質問紙を配布し分析予定である。

研究2

2017年10月から女性同性愛者3名に半構造化面接を3回実施し、複線経路・等至性モデル(TEM)

(安田・サトウ, 2012)により分析し、作成したTEM図を提示してフィードバックを行った。TEM図を用いて3回面接をしたことで、女性同性愛者のアイデンティティ形成までのプロセスやその時の感情の振り返りが促進され、詳細なプロセスが把握できた。その結果、3名とも「男の子に告白してみる」「女性を好きな自分を隠そうとする」「好きな女性がいても告白できなかった」「女性を好きになるのは一時的なものだろうと思込む」などの経過を経てアイデンティティを形成していた。また、学校教師や友人・両親から、「同性愛者は汚い」「同性愛者なら縁を切っても良い」など、同性愛者に対するネガティブな言葉をかけられる経験をしていることも明らかとなった。対象者3名は、他者からの同性愛者に対するネガティブイメージを受けながら異性愛者のように振舞い、同性愛者であることを隠しながら生きてきたことが考察される。なお、今回の対象者はこのような状況下でも認めてくれる人との出会いなどを経て、女性同性愛者として生きていくことを決断し、現在は自身のアイデンティティについて不安や葛藤はないと述べている。この結果より、女性同性愛者は異性愛規範に沿った生き方や人々の認識の薄さ・ネガティブイメージを受け取りながらアイデンティティを形成していったことが考察される。今後の日本は、性的マイノリティへの理解促進や異性愛規範が性的マイノリティの生きづらさにつながっていることを促す啓発運動を積極的に行っていく必要があるだろう。今後の予定としては、2018年4月より質問紙を配布し、回答を募る。また、研究2におけるインタビューが残り1名控えているため、2年生の前期までに終了させる。その後は質問紙の量的分析やTEM図作成および修正を行いつつ、修士論文の執筆に励む予定である。

4. この助成による発表論文等

現時点での発表はなし

5. 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所大学院生研究助成DB2922「女性同性愛者のアイデンティティ形成についてー異性愛主義の影響からー」を受けて行ったものである。